

第2回
入間市ヤングケアラー実態調査
結果報告書



令和7年5月

目次

1. 調査の概要	P3
1) 調査の目的	
2) 調査対象	
3) 調査方法	
4) 調査期間	
5) 調査項目	
6) 集計・分析	
7) スケジュール・役割分担	
2. 調査結果	P5
1) ヤングケアラーについての理解	
2) ケアを受けている人の有無	
3) 自分をヤングケアラーと思うか	
4) 相談できる人、理解者の有無	
5) 今の気持ちを誰かに話をしたいと思うか	
3. 個人面談対象者と実施状況	P10
4. 今後の方向性	P12

ヤングケアラー実態調査結果

1 調査の概要

調査の目的

動画視聴による普及啓発を実施し、ヤングケアラーに対する認知度・理解度を高めるとともに、家庭での困りごとに関するSOSを発信できる機会、自身のケア負担等を振り返ることができる機会とする。併せて、18歳未満(小・中学生のうち)にしっかりと普及啓発、相談先の周知、関係性の構築をすることで、援助希求力・受援力を育成する。個別の対応が可能となること、必要な支援にすぐに繋ぐことができるところから、アンケートは記名式とし、ヤングケアラーの可能性がある子どもには個人面談を実施し、状況やニーズの把握等、子どもの意見を聴取する。子どもの意向や必要性に応じてサービスの調整を図るとともに、支援の在り方や支援施策に反映をする。

2)調査対象(令和6年4月1日付け在籍数)

(1)市立小学校16校の1年生から6年生:計 6,458人

内訳	小学1年生:1,021人	} 低学年
	小学2年生: 977人	
	小学3年生:1,115人	
	小学4年生:1,092人	} 高学年
	小学5年生:1,098人	
	小学6年生:1,155人	

(2)市立中学校11校の1年生から3年生 計 3,313人

内訳	中学1年生:1,060人
	中学2年生:1,155人
	中学3年生:1,098人

3)調査方法

- ①実態調査の流れについて、担任等から児童・生徒に説明を実施。
- ②1人1台タブレットのトップ画面に配置した「教えて！ヤングケアラーのこと」を視聴したあとに記名式アンケートをロゴフォームから回答。
各児童に聞いて欲しいカードを配布。
- ③アンケート結果を基に、面談者の選定および個人面談による意見聴取の実施。

4)調査期間

令和6年7月5日(金)～令和7年1月25日(土)

5)調査項目

下記 5 項目をクローズドクエスチョン、記名式で行った。

- ① ヤングケアラーについて理解できましたか
- ② おうちに介護や世話を受けている人はいますか
- ③ 自分がヤングケアラーだと思いますか
- ④ 今、自分が困っていること、不安に思っていることを相談できる人、わかっている人はいますか
- ⑤ 今、あなたが困っていること、不安に思っていることを誰かに話してみたいと思いますか

6)集計・分析

ロゴフォームの集計機能により、単純集計を行う。

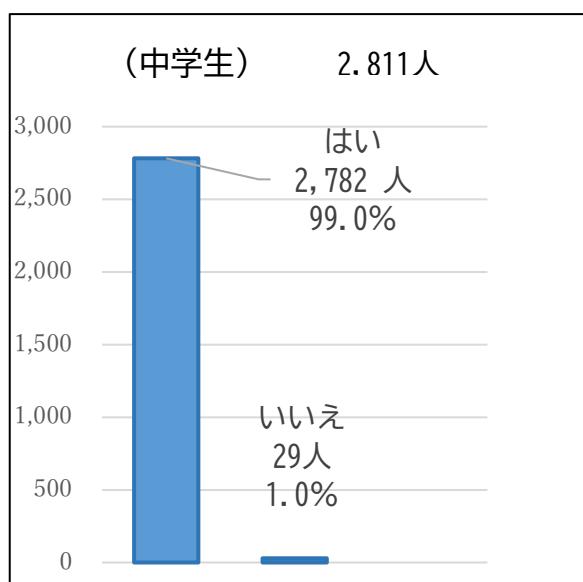
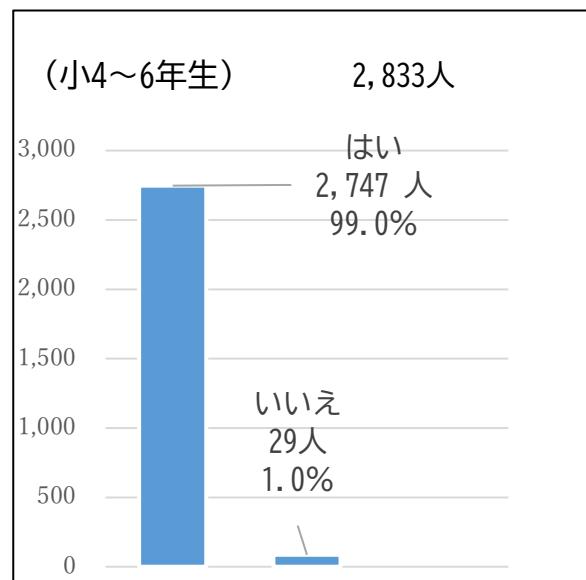
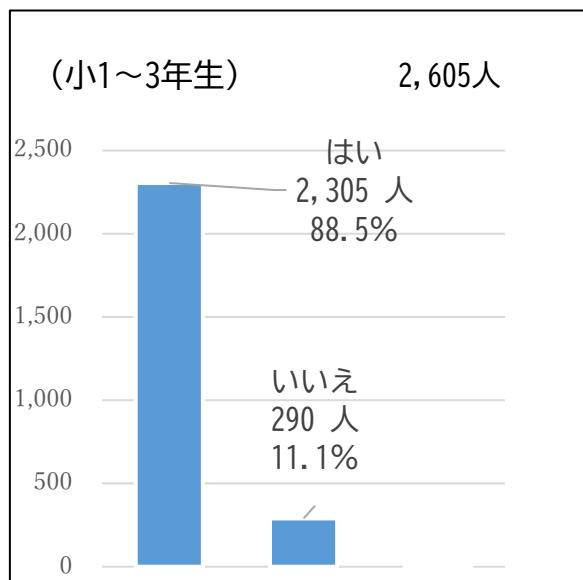
7)スケジュール・役割分担

月 日	内 容	担当課
令和5年12月～1月下旬	実態調査内容等の検討・学校教育課との調整、実施起案	こども支援課
令和6年 2月19日	校長会への報告(依頼)	こども支援課
5月10日	校長会への報告(依頼)	こども支援課
5月下旬	ロゴフォーム申請 アンケート作成開始	こども支援課
6月上旬	動画・アンケートの動作確認	こども支援課 教育総務課
6月中旬～7月上旬	各校へアンケート依頼	こども支援課 学校教育課
令和6年7月5日～ 令和7年1月25日	動画視聴・アンケートの実施	学校教育課 こども支援課
令和6年 9月6日～ 令和7年2月27日	集計・個人面談	こども支援課 各小・中学校
令和7年 3月	報告書作成	こども支援課
6月	公表	こども支援課

2 調査結果

1)ヤングケアラーについての理解

①ヤングケアラーについて理解できましたか

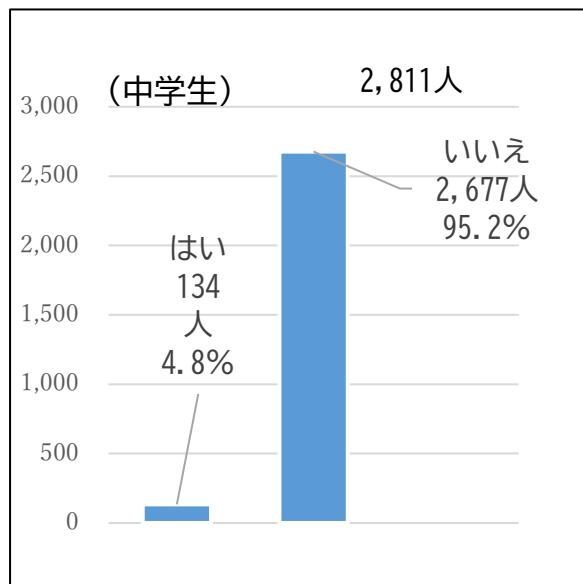
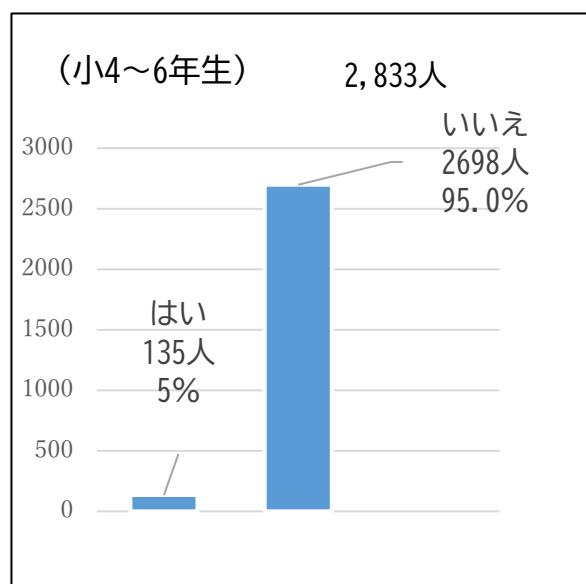
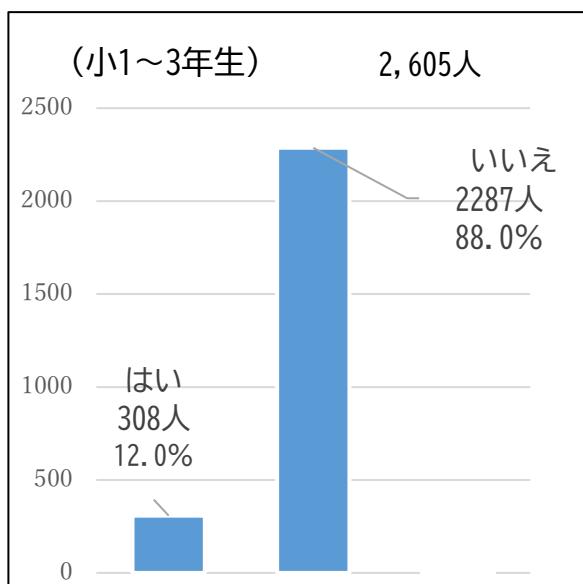


小学生、中学生ともに動画視聴では、「理解できている」という結果である。

動画内容では、小学生、中学生と内容が同一だったこともあり、低学年には言葉の意味を理解することは難しい、もう少しあわかりやすい言葉で、年齢に合わせた内容に工夫をしてみたほうがよいのではないかという意見を先生からいただいた。

2)ケアを受けている人の有無

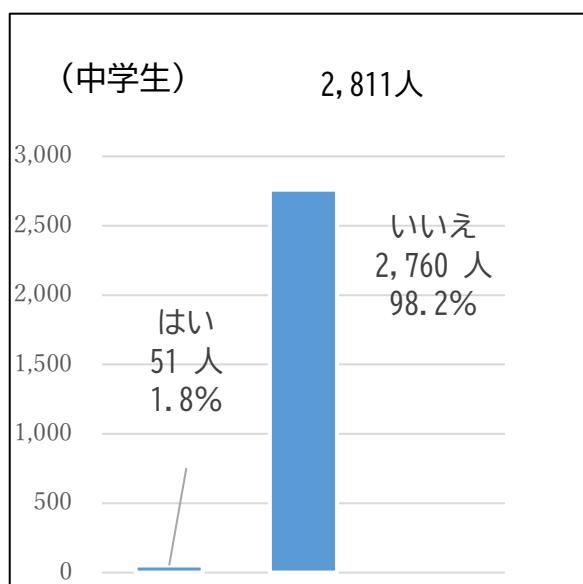
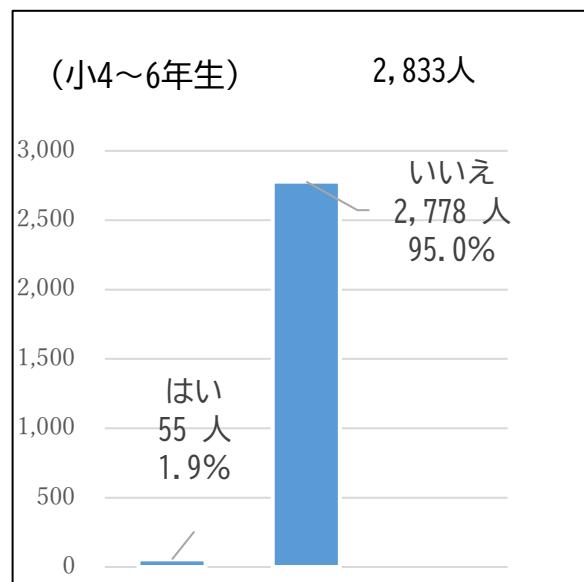
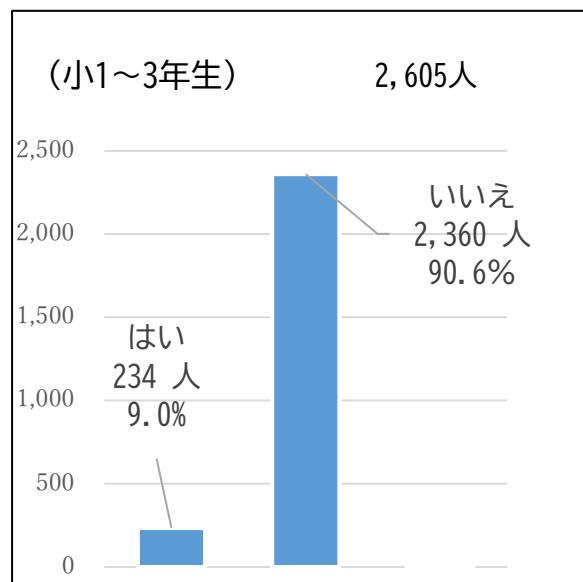
②おうちに介護や世話を受けている人はいますか



小学校 4～6 年生、中学生の約5% は「おうちに介護や世話をしている人がいる」と回答した。小学校1～3 年生は「いる」と回答したこどもが多かったが、「介護」「世話をする」という言葉の意味は、動画を一度観ただけでは理解することは難しかったためと考えられる。

3)自分をヤングケアラーだと思うか

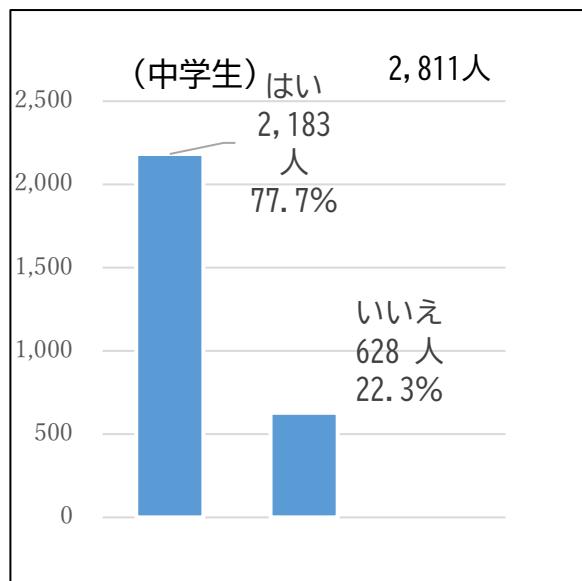
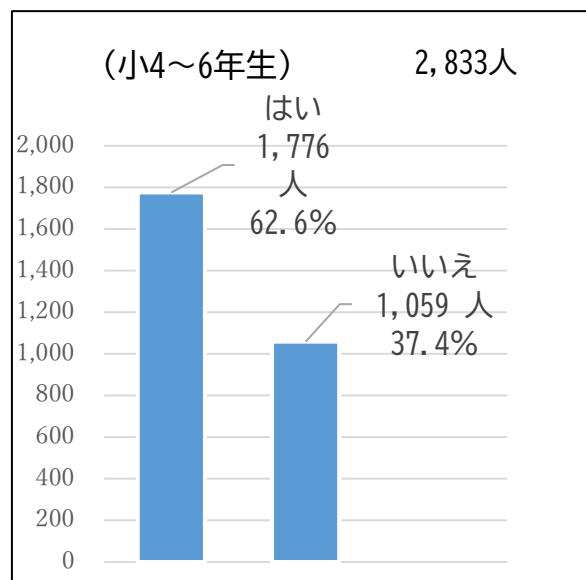
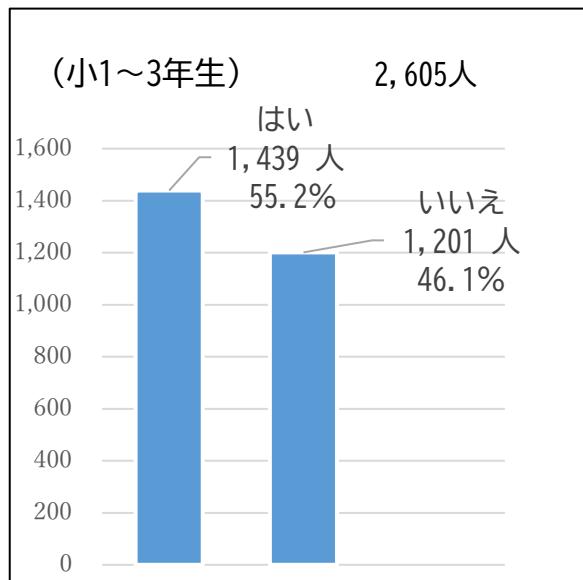
③自分がヤングケアラーだと思いますか



自分がヤングケアラーと思うと答えた児童は小学校 1 年～3 年生が9% (234 人)小学校 4 年生～6 年生が、1.9%(55 人)、中学生が 1.8%(51 人)であった。「おうちで介護をしている」児童の有無の結果と比較すると「はい」と答えたこどもは少なかった。

4)相談できる人、理解者の有無

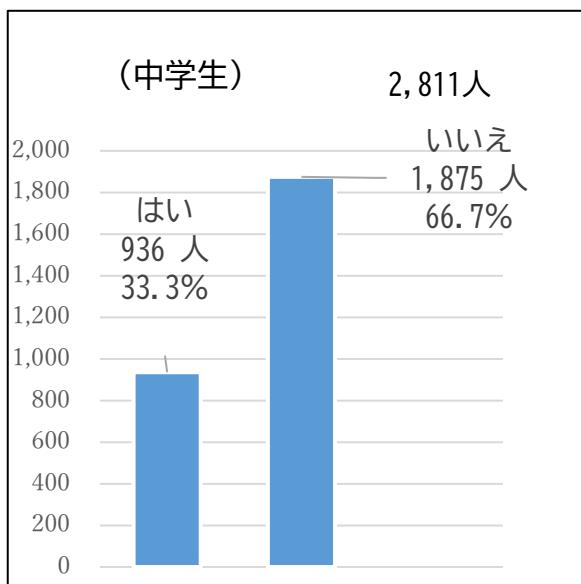
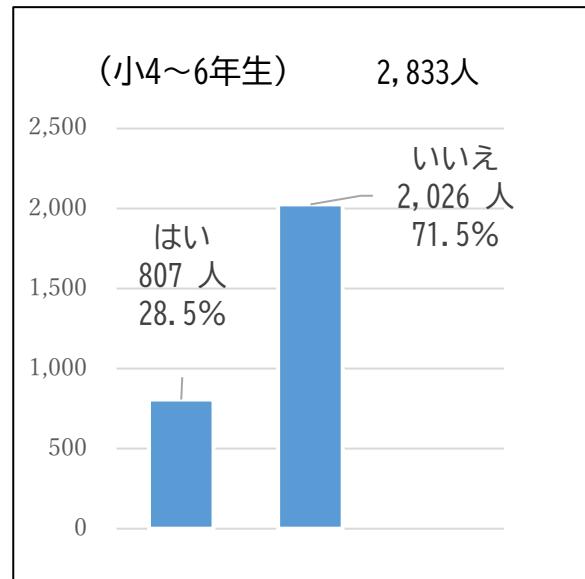
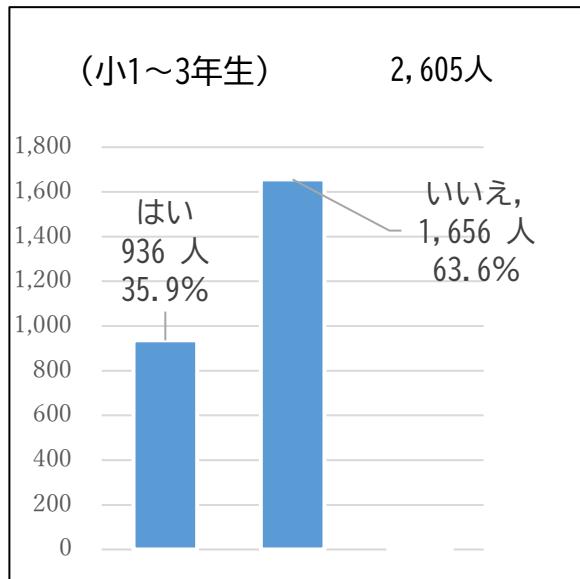
- ④ 今、自分が困っていること、不安に思っていることを相談できる人、わかっている人はいますか



「いいえ」と答える児童は小学生に多い。誰に相談してよいのか、「きいてほしいカード」を配布したが、どのように利用していいのかわからないという理由も考えられる。

5)今の気持ちを誰かに話をしたいと思うか

- ⑤ 今、あなたが困っていること、不安に思っていることを誰かに話してみたいと思いますか

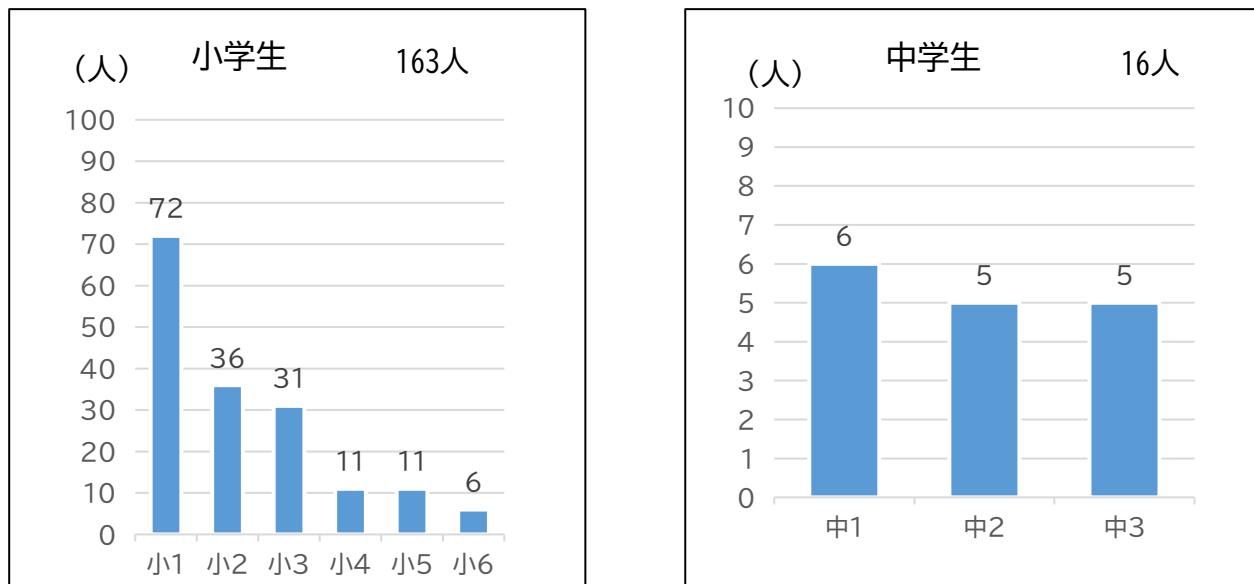


小学生、中学生ともに「いいえ」と答える児童が多かった。

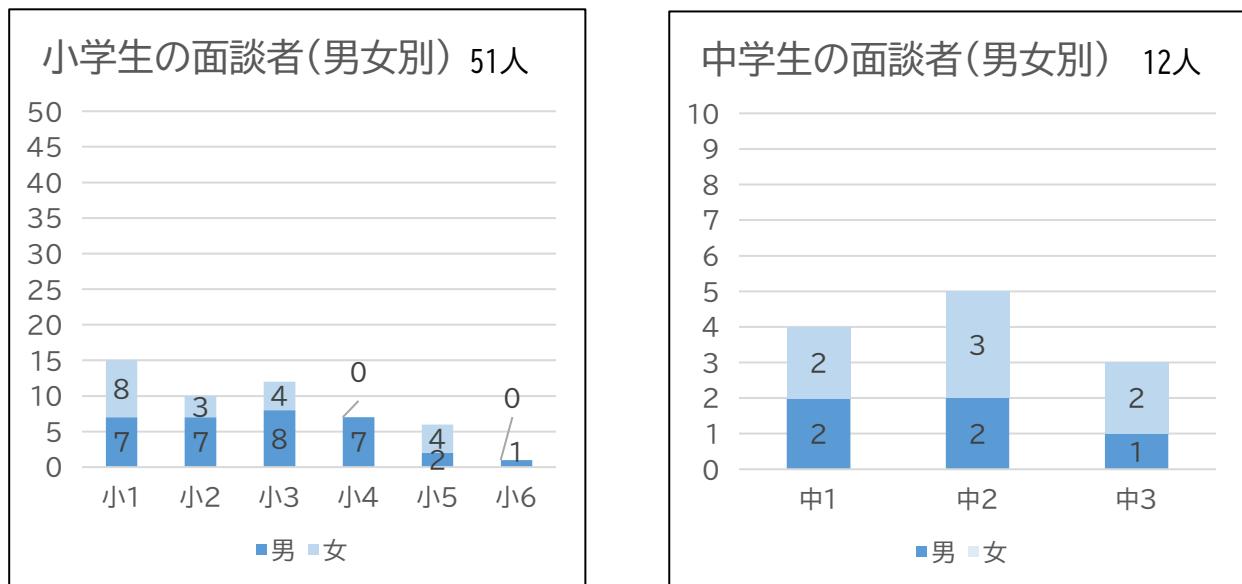
高学年や中学生になると、「家のことを知られたくない」「ヤングケアラーだということを隠したい」と言った児童も混在していると考えられる。

3 個人面談の対象者と実施状況

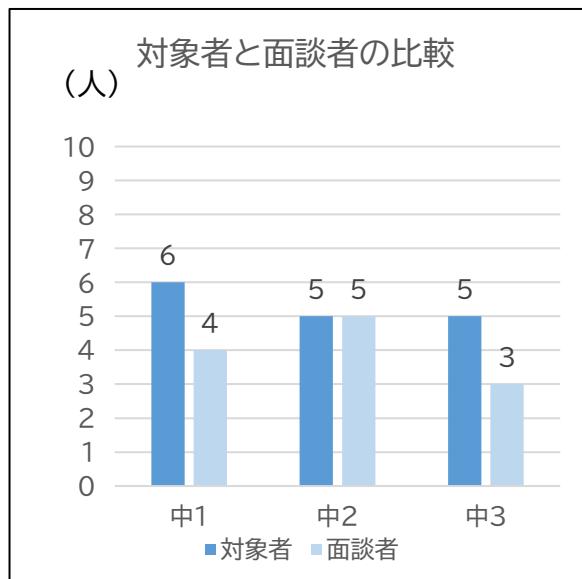
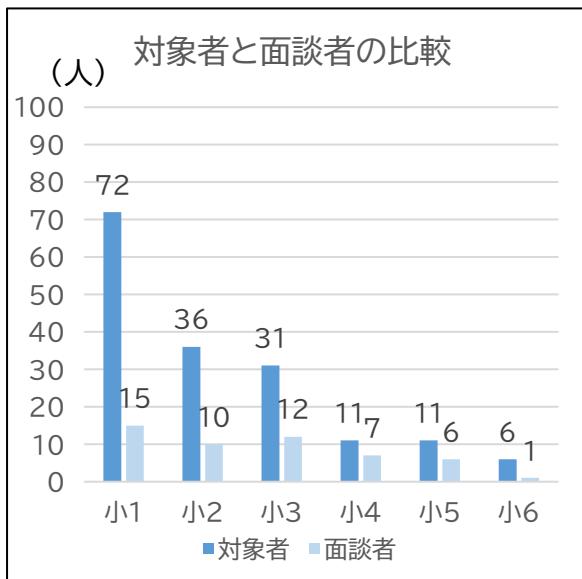
【個人面談対象者】



【個人面談実施状況】



個人面談の対象者は、アンケート結果と学校生活の状況により、ヤングケアラーの可能性のある子どもを抽出したところ、小学生163人、中学生16人であり、そのうち、面談を希望した子どもは小学生22人、中学生5人であった。また、子ども支援課で面談が必要と判断した子どもが小学生29人、中学生7人おり合計小学生51人、中学生12人に面談を実施した。面談は、本人とヤングケアラーコーディネーター、子ども家庭支援員、保健師が1対1で実施し、「どんなケアをしているのか?」「困っていること、悩んでいること」などを聞き取りした。



【動画視聴によるアンケート、面談実施の結果】

- 面談からヤングケアラーである児童を把握したが、児童の立場からケアをしていることを周囲に知られたくない、また、相談したことを親に知られたくないという思いがあることがわかった。
- 小学生はヤングケアラー＝お手伝いと思っている児童が多く、面談時にヤングケアラーについて説明をしてからの聞き取りとなった。
- 自分の困っていることが何か？何をして欲しいのか？がわからないという児童もいた。
- ヤングケアラーだということに気が付かず、介護や世話など当たり前の生活になっている児童もみられた。親も児童もヤングケアラーとしての認識がないということが明らかになった。
- ヤングケアラーの問題だけでなく、虐待と思われる児童の把握もあり、関係機関に繋げることもできた。
- 学校、保育所(園)等関係機関との情報共有することで連携を図ることができた。
- 面談で小学校低学年では、動画の内容、言葉の意味がわからない状況があり、年齢に応じた内容での動画やアンケートの必要性がわかった。

4 今後の方向性

1)周知・啓発について

ヤングケアラーの認知度は徐々に広まっているが、まだ、ヤングケアラーについて正しく理解することが難しい状況であることがうかがえた。周囲の大人、こども共に、ヤングケアラーについて正しく理解できるよう周知、啓発を継続していく必要がある。そして、すべてのこどもが心身ともに健やかに成長できるよう環境整備を図っていく必要がある。

2)相談体制の整備について

こどもが抱えている問題(親子関係・きょうだいの問題、介護や世話等)に対し、大人が気づき、声をかけ、いつでも気軽にヤングケアラー相談窓口につながる環境を整備し、「こどもがこどもらしく」過ごせるように支援をつづけていく。そのためには、関係部署、関係機関、事業者・団体等にヤングケアラーについてのリーフレット等を配布する等、相談窓口があることを周知していく必要がある。

3)関係機関との連携

ヤングケアラーを早期に把握し適切な支援につなげていくため、教育機関、児童福祉、生活福祉、高齢者福祉、障害者福祉部局などの関係機関と連携・情報共有し、対応力の向上と共に理解を深め、支援体制を強化していく必要がある。

4)地域づくり

地域全体がヤングケアラーサポートに関する理解を深め、相互に支えあう意識、結の心を醸成していくためのまちづくりを目指す。

そのためにまずは、こども家庭センターにおいて、地域資源を把握、開拓していく中で、市、保護者、学校、地域住民等、関係機関が手を携え一体的にヤングケアラーを支援するという支援の輪を広げていく必要がある。